

研究資料

永福寺本遊行上人縁起絵

宮次男

昨年(昭和五九年)の春、静岡県三島の時宗寺院田福寺の住職称宜田修然師の来訪をうけ、その際、別府鉄輪の永福寺に一遍上人縁起の絵巻が一卷蔵されているという御示教を受けた。その秋、八幡宮御縁起絵の調査のため、大分県に出張する機会があったので、同寺を訪れ、拝見に及んだところ、意外にも古様で、かつ、なかなかの優作であるのに驚いた。遊行上人縁起に特に関心を寄せている私にとつては、新しい資料を得た喜びに浸ったのであった。もっとも、この絵巻は、すでに昭和二十九年一月二〇日、別府市文化財に指定されており、江戸時代の摸本と推定されているが、私の見た所、その年代ははるかに遡るものである。

この絵巻は紙本着色で縦三一・五センチ、全長一四九七・六センチで、これを所する温泉山永福寺は別府の鉄輪温泉郷の中心にある。この鉄輪温泉は一遍が開いたという伝称があり、現在も秋の彼岸に永福寺の一遍上人坐像を温泉に入れる「湯あみ祭り」が盛大に行われている。また、この寺は江戸時代末までは湯滝山豊鶴院松寿寺と称し、寺伝によると、一遍に深く帰依した豊後国主大友頼泰が一遍の為に建立寄進した寺で、明治時代の初めに廃寺となったが、のち、備後尾道の西郷寺末の永福寺の寺号を借りて再興し、現在に至っているということである。

さて、遊行上人縁起絵は、宗俊編述の「一遍上人絵詞伝」として広く知られるところであるが、すでに「遊行縁起」の呼称もあり、その内容が、時宗の開祖一遍と二祖他阿の伝記を時宗教団成立に眼目をおいて述べたものであることから、近年、上記の名称で呼ぶことが広く行われている。私は年来、この絵巻遺品を調査し、その成果の大略を至文堂「日本の美術」56『一遍上人絵伝』(昭和四六年一月)および角

川書店『新修日本絵巻物全集』23「遊行上人縁起絵」(昭和四四年九月)に発表した。これらの著作の中では現在知られるかぎりの諸本について言及したが、この永福寺本についてはふれていない。そこで、本稿において、前者の欠を補い、あわせて永福寺本の遊行上人縁起絵諸本中の位置について私見を述べたと思う。

順序として現存する宗俊本の鎌倉・室町時代製作の諸本をあげると、次のようになる。

京都 金蓮寺蔵二十卷(徳治二年の奥書あり、るも作期は下る。)

神戸 真光寺蔵十卷(元亨三年の奥書あり)

藤沢 清浄光寺蔵十卷

新潟 専称寺蔵十卷

山形 光明寺蔵十卷(狩野元秀筆、文禄三年の奥書あり)

京都 金光寺蔵四卷(卷三、五、六、九)

尾道 常称寺蔵四卷(白描、卷一、五、六、八)

東京国立博物館蔵二卷(田中親美旧蔵、卷三と七の残欠本)

長野 金台寺蔵一卷(卷二)

京都 金蓮寺蔵一卷(卷八)

埼玉 遠山記念館蔵一卷(卷一、六、七、八の残欠本、永徳元年の奥書あり)

米国 フリア美術館蔵一卷(卷七の残欠本)

米国 ニューヨーク公立図書館蔵一卷(白描、卷七、九の残欠本、スペインサー・コレクシヨンの)

奈良 大和文華館蔵一幅(卷二第一段絵)

このほか、常称寺本、東博本、遠山本の断簡が個人蔵として確かめられるが、ここでは略す。また、スペインサー・コレクシヨンの本は常称寺本の残欠と考えられるものである。なお、愛知県碧南市の称名寺に蔵される一本があるときくが、これがいかなるものか、拝見の許可が得られないのがまことに残念である。

以上、少くとも十三種におよぶ宗俊本の中世の遺品が確かめられたが、これにこのたび

別府 永福寺蔵一卷(卷七)

を加えることができたのである。

次に、現存諸本についてみると、詞章はいずれも同文であるが、絵では諸本の間で人物の扱い方やその観照の態度、建築物の形やその配置などに共通した同異が認められ、その同異について整理分類すると、少くとも三つの転写系統に分類することができると、その結果をあげると、次のようになる。

甲本系 金蓮寺本 真光寺本 清浄光寺本 専称寺本 金光寺本 東博本 大和文華館本

乙本系 光明寺本

丙本系 金台寺本 常称寺本 遠山本

このうち、乙本系は光明寺本のみあげたが、この本の原本になった清浄光寺の藤沢道場古縁起と称する鎌倉時代の作品が存在した。しかし、惜しくも明治四十四年に焼失、その忠実な摸本が東京国立博物館に蔵されている。これは狩野養信一門の執筆したものである。また、大阪逸翁美術館には、寛政元年・同二年の住吉摸本があり、これには詞書がない。したがって、この乙本は江戸時代には藤沢の遊行寺(清浄光寺)の秘蔵本系統として重要視されていたのである。さらに、この焼失した古縁起は遊行上人縁起絵の原本とみなされていたのである。しかし、中世の遺品はわずかに光明寺本を数えるにすぎない。

これに対し、甲本系に分類した遺品はすこぶる多いもので、私はこの系統が原本の正系と考えるものである。それはともかく、両本の違いをのべよう。

甲本では、先ず、時衆として登場する僧・尼の区別を面貌や皮膚の色で明瞭に示そうとする傾向があるが、乙本ではその区別がさほど明瞭でない。しかし、乙本にみる一遍および他阿の姿は他の人物より一きわ大き目にし、その膚色も必要以上に黒くして、きわだたせている。そして、全体的に乙本は人物描写に比重がおかれていて、人物表現における観照態度の差異がはっきり認められるのである。

構図に関しては、第一巻第一段で、兇賊にあう一遍が、甲本では敵の大刀を手で受けとめる場面と、その大刀を肩にかついで逃がれる場面を異時同図式に表現しているが、乙本では賊の大刀を奪って逃げる一遍の姿が描かれているだけである。

次に、第二巻第一段では、信州伴野で踊り念仏を始行した際、観衆の武家が、甲本

では屋内から見物する態に表現されているのに対し、乙本では家から外に出て、庭上に坐してこれを拜見するという態度となっている。この態度の相違と先述の一遍重視の表現は、明らかに宗祖敬信の心情表現とみるべきで、そこに両本の制作態度の基本的相違がみられ、その前後関係はいうまでもなく、甲本が先行すると認めざるをえない。

更に、第三巻第三段の一遍が京都四条京極の釈迦堂に入る場面、乙本に限り、橋ぎわに地獄の形状を人形で造ったものを机上においた絵解き法師が描きそえられている。そのほか、第二巻第二段の白河の関場面の旅人の配置や同第三段の塩釜神社の廻廊の形、第九巻第二段の竹生島における住僧らの巖飛びの姿勢など、些細な点ではあるが基本的に異っている点が指摘できるのである。

これらに対し、丙本系は構図のとり方がかなり自由で、いわば異本の部類に入ると考えられるものである。これら諸本の相違については、前掲二書で挿図を入れて論述したので参照されたい。なお『新修日本絵巻物全集』では、ここで述べた甲本系を乙本、乙本系を甲本と記述したことをおことわりしておく。

では、永福寺本はいずれの系統に属すであろうか。これにふれる前に、順序として永福寺本の内容と現状についてのべよう。

永福寺本は巻七だけの零本であるが、この巻七は当然、二祖他阿真教の行状が述べられているわけである。

第一段は、永仁六年、武州村岡にて、他阿所労のため臨終を覚悟して時衆に教誡を書く段である。巻頭の詞書「同六年、武州村岡にして、所労につきて臨終し給へかりける時、時衆のために書給教誡云」の三行分が欠損して今はない。絵は病床に仰臥した他阿が弟子にかこまれ、ねながら懐紙に教誡を書くところで、庭には市の後か堀立小屋が四屋二列に建ち、見舞の二女と尼が立たずむ。

第二段 越中国放生津にて、南条九郎という人、往生について問い、念仏者となる。絵は、放生津の海岸に面して建つ家屋で、他阿と対座する南条九郎を中心に、九郎と他阿の背後に坐してこの法談を聴聞する僧尼や俗人、庭先に坐る九郎の従者二人を画面の右端から描き、庭前から海辺の松や、渚に舫う三艘の小舟が広々とし

た中に描き出されている。

第三段 越後国池の某という者、所労の折りに他阿の弟子に看病される夢をみて病氣平癒する。絵は病室に臥す病人の枕頭に僧綱領の僧が坐して祈禱の態、さらに五人の時宗僧が病人の側で合掌する。この五僧は淡墨線だけで描かれており、夢中の情景を示すものである。病間には屏風が立てられ、燈台のそばの火鉢には薬湯が煎られていて、後姿の女性がそばについている。病間の背後には控え間を置いて別棟の厩があり、今しも、手に帯を持ち、肩に飼料の草をかついで男が厩に向けて歩いている。

第四段、越後国鶴河庄萩崎極楽寺の契範円観房という碩学、柏崎に逗留中の他阿に法門を尋ね、帰依する。絵は一室で他阿と法談する円観房、その背後にはそれぞれの弟子僧たちが坐して聴聞している。この建物の背後からは街路がのびて大河に架る橋につづいている。

第五段、信州善光寺に七日参籠、日中の念仏を仏前の舞台で勤行する。絵は、善光寺の門前の柵から入って、仁王門を入れて二天の楼門前で他阿を先頭に時衆が僧尼各二列に進み、楼門の内、仏殿の前の舞台で他阿を中心に時衆が圍繞し、行道念仏を勤行する。その有様を参詣の男女が仏殿の階や縁をはじめ庭上で見物している。

第六段 甲斐国中河で人々に和歌を書き与える。絵は屋内、畳の敷きつめられた部屋で軸装の発装を僧にもたせ、軸を広げて名号を書く他阿と、その有様をみる弟子たち。すでに書き終った軸を広げて見るものもおり、その場の和やかな雰囲気が見られる。

以上が永福寺本各段の内容である。これは、第一段の巻頭詞の一部を欠くが、宗俊本巻七を完備するものである。

そこで、この永福寺本が、先に分類した三系統のうち、いずれの系統に属すかが問題となる。しかし、この巻七は、構図の上でこれを決定づける特色がない。そこで、人物像の観照法についてみると、乙本にみる重厚ともいえる人物表現でなく、どちらかというと、淡々とした中にその表情を的確にとらえたもので、特に尼僧のやさしげな、また女性的な魅力すら感じられる表情はみるべきである。また他阿像

の表現については、本巻では他と比べて特に目立たせる表現はとっていない。こうした表現は甲本系の共通の特色とみなすべきである。

ところで現存の残欠諸本中、永福寺本と同じ一具のものがあるか否かの問題がある。巻七を欠く残欠本としては、金光寺本、常称寺本、金台寺本、金蓮寺別本、大和文庫本を数えるが、いずれも絵の作風や筆致が一見して異なるものばかりで、永福寺本と同本の存在は確かめられない。したがって、永福寺本は今のところ唯一の残欠本となるわけである。

次に、永福寺本の特色についてのべよう。この絵巻は、一時、保存環境が悪かったらしく微損のあとが点々としてあり、また、色彩もかなり剝落して淡くなっている。したがって一見、淡彩風に思われる。しかし、淡々とした中に一種の統一があつて、原初にあつてもさほど濃彩でなかったことが推測される。

各画面の構成は、甲本系に共通するが、添景人物の描き入れが簡略になつていたり、群衆の人数も少なくなつていたりする所が多い。

すなわち他本では、第一段 武州村岡の場面では、病床を見舞う庭上の俗人が画面右上にも二名いるものが多く、第三段 池の某の病室には看病の女性がもう一人襖を開けて入ってくる。また、第四段 柏崎の法談につづく街路には、橋のたもとに樹下の小祠があり、騎馬の武士が従者を前後に従えて橋にかかるうとしている。さらに第五段、善光寺の念仏勤行場面では、それを見物する群衆がはるかに多く、また本堂の内部の様子も描き出されて、場面は一段と豊富な内容が示されている。

以上のように、本絵巻は、他本に比べて、各場面の登場人物の数が少いことが明らかで、それだけに画面がいささか散漫になつた所がある。第一段、第四段の場面がその例である。しかし、第五段の善光寺の念仏勤行の場面は、観衆の人数が他本に比べて半減しているのがかえって、他阿の率いる時衆集団のエネルギーのすさまじさを示す効果をあらわす結果となつている。

本絵巻にみる添景人物の省略が他本に比べて多いことは、これを転写した絵師の技量の拙さによるものでは決してない。それは、本絵巻の彩色が比較的淡彩であることと関連するもので、恐らく、これの制作が短期間のうちに成し遂げる必要があつて、かかる方法がとられたのではないかと理解されるのである。その証拠に、本

絵巻にみる景物、建物、特に人物描写にみる筆線の暢達さ、さらに人物の表情を的確にとらえた表現力は、この筆者が決して凡庸な絵師でないことを示すものである。例えば、人物の面貌表現をとると、目は殆んど一線で示しながら、微妙に変化をつけて各人の表情に変化をつけてあらわし、しかも、ひとみがある中に示されているのであって、これにはよほどの修練が必要かと思われる。また、衣文線も硬直化しておらず、着衣のやわらかい質感が示されて、その描線の巧みさが淡彩なるがゆえによく示されているのである。

では、本絵巻の制作年代は何時頃であろうか。

本絵巻の原本の制作は、金蓮寺本の奥書にみる徳治二年（一二〇七）の年紀を一応の目安にすることができる。したがって、本絵巻の上限の可能性は、この年までたどることができるが、転写本として考えると、それより以降であることはいうまでもない。ところが、本絵巻が転写本であることは、その性格上、これの制作年代を、様式・技法の観点から推定することはきわめて困難といえる。しかし、その描線の性格についてみると、一見、硬い中に柔かな趣きがあつて、しかもきわめて洗練された筆を示している。このような描線は鎌倉絵画の伝統が十分にいかされている時期の作品にみられるもので、文和四年（一二三五）以前の神奈川光触寺藏焼阿陀縁起に類似の描線をみる思いがする。また、これだけの表現力をもった絵師であれば、当然、人物表現において、同時代の共通様式が窺われるはずであるが、この絵巻には、南北朝末から室町時代にかけて示される人物の肉感的な庶民感覚は感知することができない。そこに描き出された人物、特に面貌表現はいずれも、鎌倉時代大和絵の正統派絵巻にみられるものである。

以上、本絵巻にみられる作風、特に描線の性格は、鎌倉期の絵巻としての条件をそなえるもので、十四世紀後半を降らぬ頃の制作と推定するものである。遊行上人縁起絵の現存諸本中、比較的古い時期に属する佳品といえよう。

なお、巻末に

浄光明寺什物之寄附証

遊行半白老（香炉印）（角印）

と銘記されていた由、寺の記録にあるが、現在はこれを判読することができない。

永福寺本遊行上人縁起絵

遊行上人縁起絵 卷七 寸法表（単位cm）

別府 永福寺藏

縦 31.5								
横 1497.6								
第1紙	詞	37.6	第21紙	詞	39.8	第41紙	絵	31.4
2	〃	8.7	22	〃	11.5	42	〃	16.9
3	〃	10.1	23	〃	7.5	43	〃	44.5
4	絵	33.8	24	絵	48.7	44	〃	2.7
5	〃	14.3	25	〃	2.7	45	詞	19.3
6	〃	37.4	26	〃	44.8	46	〃	11.7
7	〃	10.8	27	詞	10.2	47	〃	36.6
8	詞	28.5	28	〃	18.3	48	〃	24.9
9	〃	48.3	29	〃	36.6	49	〃	23.4
10	〃	48.7	30	〃	12.2	50	〃	12.0
11	〃	7.2	31	〃	28.5	51	〃	26.6
12	絵	48.3	32	絵	31.9	52	〃	9.1
13	〃	47.7	33	〃	16.0	53	〃	49.0
14	詞	39.7	34	〃	39.7	54	〃	2.4
15	〃	31.1	35	〃	8.8	55	〃	45.6
16	絵	48.0	36	〃	49.1	56	〃	14.6
17	〃	13.5	37	〃	3.4	57	〃	5.6
18	〃	34.8	38	〃	43.7	58	絵	46.5
19	詞	16.6	39	〃	18.1			
20	〃	8.5	40	〃	29.9			

遊行上人緣起繪

別府 永福寺藏

I

II

III

IV

V

VI